

一幅のお名号に

死に直面して

彼は十八歳の青年です。農学校の学生です。肺を病む彼は瀕死の重患の床に横たわっているのです。物すごいほど骨ばかりになつた体、血色のちつともない顔、高く波うつ呼吸に動く胸、彼は私の顔を見ると涙を流して、手を高くふつて喜びます。面とむかつて会うて話すのは初めてでも、私の講演は聞いたことがあるのださうです。彼は懸命にここ数日を待っていました。私を見た瞬間「先生！」それから三十分、厳粛な悲痛な時間が流れます。

甲 「先生！」

乙 「待つていましたか、来ましたよ。」

甲 「……………(涙)……………」

乙 「聞きたいことがありますか。」

甲 「先生、霊と肉、霊の力で……………先生、私は勝ちたいのです。勝利者でありたいのです。勝つとはどうすることですか。」

乙 「あなたはこの度の病気がよくなると思いませんか。それとも死を覚悟していますか。」

甲 「死は覚悟しています。しかし……………」

乙 「それはよい覚悟です。一切の人は死んでゆきます。この大病では助からないでしょう。あなただけが死ぬるではありません。お父様も、お母様も、おば様も、そうして私も……………」

『散る桜、残る桜も散る桜』ただ前後があるだけです。

死の前に立つたあなたが勝つとは！ 安らかに往生させていただくことです。大安心の中に死を超えさせていただくことです。」

甲 「わかりました。それではどうしたら、死ぬるままが超えてゆかれるのです。」

乙 「達夫さん。あなたは如来様がいなさることを知っていますか。」

甲 「はい(うなづく)」

乙 「それは結構です。如来はあなたの永遠の親なのです。あなたに先だつて、あなたを問題にしたみ親です。絶対の大慈悲です。その大慈悲一つで救ってくださいます。こうして生老病死で悩むあなたの上を、一刹那といえども離れません。その大悲のみにあなたを托するのです。そのままです。病むあなた、起つことのできなあなたに如来は何を求めましょう。その全体が如来の大悲の願力にのせられて、安養浄土に召されます。あなたはやがて地上一切の苦悩を超えて、み親の国に召されるのです。」

甲 「死ななければだめなのですか。」

乙「救いは今日です。今です。絶対に救いたもうみ心のままに、あなたのすべてを、み手にゆだねます。しかし如来になるのは、彼岸です。死の彼方です。死はけつして単なる死ではありません。永遠の浄土に還らしていただくのです。悩みなき浄土です。ありのまま、そのありのままに救われるのです。」

甲「わかりました……………ありがとうございます。南無阿弥陀仏……………」

乙「心が安らかになりましたか。」

甲「はい……………」

乙「お念仏だけです……………。それも苦しかったら称えなくてもいいのです。もう講演の時間もせまりました。これでかえります。明日またこのころ、来ますからね……………」

□

甲「先生！如来様に一切をおまかせしました。けれども私はやっぱり死にたくないのです。これでもいいのでしょうか。それだけです。」

乙「よく言ってくれました。聞いてくださいよ。親鸞聖人のお言葉です。」

『また浄土へいそぎ参りたきころのなくていささか所労（病）のこともあれば、死なんずるやらんと心細くおぼゆることも煩惱の所為なり。久遠劫より今まで流転せる苦悩の旧里はすてがたく、いまだ生れざる安養の浄土は恋しからず候うこと、まことによくよく煩惱の興盛に候うにこそ。名残り惜しく思えども娑婆の縁つきて力なくして終るときに彼の土へは参るべきなり。いそぎ参りたき心なき者をことに憫みたもうなり。これにつけてこそいよいよ大悲大願は頼もしく往生は決定と存じ候え。』

この意味をもつと平たく言いますよ……………中略……………死にたくないままで死んでゆく。そのまま助かるのです。」

甲「無言……………合掌……………念仏……………」

乙「もう時間がありません。お浄土でお会いさせていただきますでしょう。ではさようなら……………」 念仏……………（午後一時）

彼はそれから一時間、苦しい中にも安らかに念仏しました。そうして午後二時、私と別れて一時間、静かに念仏の呼吸をひきとつて、み親の浄土へ不生の生を受けました。一つの生命が永劫の苦悩をおえて彼岸に永遠に生きます。死は最後の厳粛です。

裁く前に

甲「先生！ 私たちはこんなことを言いたくないのですが、実はこの支部に問題をおこした人が三人ほどいるのです、○△関係なのです。たいへんに社会が問題にしています。役場などでも、『光明団が何だ。いぼつたつてだめだ。あんな者が団員にいるのだから。』と罵っていたのです。実に困ります。あの三人を除名にしたらどうでしょうか。」

乙「そうですか、それは困った問題が起きましたね。しかし除名することはできません。もしみんながその三人を棄ててくださるならば、私はみな様と別れて、そのだれも相手にしてくれない、宿業に泣く子といっしょに歩ませていただくかなくてはならなくなります。私がこう言ったからとて悪を奨励するのではないのです。しかし、その痛ましい三人が、もし事実ならば、今は後悔して、世間を狭くはじているでしょう。そのさびしい心を思う時棄てられないのです。それにそうした相はそのまま私の心の相なので、裁く者に合掌して念仏申そうではありませんか。そうして私の心を見つめようではありませんか。……………明日の日にだれがそんな相を出さないと誓われましょう。役場などで光明団かと言われることはありますがいいことです。光明団の団員である前に、本願寺の宗徒であり、何々寺のご門徒です。それなのに、何々寺のご門徒ともある者がと言われなくて、光明団員がと言われることは感謝しなければならぬことでもあります。考えなおしてくださいね……………皆様……………」

一幅のお名号

甲「先生。南無阿弥陀仏とは何ですか。」
乙「お答えする前にあなたの一生を何という言葉で象徴しましょうか。」
甲「さあ……………わかりません。」
乙「金をためて……………人に斬られて、土を食って庭に斃れた富豪がありましたね。何と表象します。」
甲「……………『ご苦勞様』と書いて死体につけておいたらいいでしょう。」
乙「それは上出来です。それではあなたの一生へは。」
甲「ああ、私のこれまでもまた、何もない無意味な生活でした。」
乙「ご苦勞様とか、白紙の巻物で結構でしょう。」
南無阿弥陀仏とは、如来のみ名であるとともに、その如来と仏凡一体に生きる者の名なのです。南無阿弥陀仏、無量寿、無量光がみ名の内容です。一生涯を、生きて動く一幅の名号としたらどうでしょう。」